

九鬼周造の時間論における「垂直的エクスタシス」

—オスカー・ベッカーの「永遠の現在」を手がかりにして—

上田瑞季(法政大学)

九鬼周造(1888-1941)は、「時間とは如何なるものであるか」(XI, 128)という問いを出発点にして、ギリシア哲学やインド哲学・仏教思想に見られる伝統的な回帰的時間から、九鬼独自の時間論を展開した。九鬼の「回帰的形而上学的時間」は、全く同一のことが無限回繰り返されるだけでなく、一般的な時間の観念を超出し、超時間性や永遠、無限といった形而上学的問題に肉薄していったのである。それゆえ九鬼自身ですら、自らの特異な時間観念を「全面的に時間的ではない時間である」(V, 18)と述べている。

しかし、九鬼の時間論全体を、私たちの日常的かつ経験的な次元から理解することは必ずしも容易ではない。その理由の一つは、発表者の理解によれば、九鬼が導入した「垂直的エクスタシス」概念にある。九鬼は、ハイデガーの『存在と時間』(1927)で議論される時間性を「水平的エクスタシス(現象学的存在学的脱自)」として理解し、それを補完して乗り越えるために、「垂直的エクスタシス(神秘說的形而上学的脱自)」という新たな概念を登場させた。こうした「垂直的エクスタシス」は、九鬼にとって回帰的形而上学的時間の特徴として重要な位置を占めている。

だが、九鬼のいう「エクスタシス(脱自・脱我)」、すなわち時間性が「自己より脱して他へ行っていること」(III, 244)が垂直的であるとは、一体いかなる事態であろうか。さらにいえば、私たちは「垂直的エクスタシス」を通して、どのような体験をするのだろうか。九鬼の時間論全体を理解するためには、その内に含まれる「垂直的エクスタシス」の内実を明らかにしなければならない。

ただ管見の限りでは、従来の九鬼哲学研究において、九鬼独自の「垂直的エクスタシス」については、ほとんど解釈されてこなかった。確かに、九鬼自身が「垂直的エクスタシス」そのものをさほど詳述していないことも、これまで研究されてこなかった理由の一つとして考えられよう。貴重な先行研究としてここで指摘しておきたいのは、田中久文(1992/2022)と、本郷均(2018)の研究である。まず田中は、「垂直的エクスタシス」においては、私たちは文字通り「エクスタシー」を体験すると解釈している。しかし田中は、それがいかなる種類の「エクスタシー」であるのかについてまでは言及していない。また本郷は、「垂直的エクスタシス」を理解するために、神秘主義の「エントゥシアスモス(神に満たされること) *enthousiasmos*」概念を援用して解釈している。

「エントゥシアスモス」に関しては、伊藤邦武(2014)も触れているが、実際には九鬼が言及しているわけではないため、「エクスタシス」と「エントゥシアスモス」を重ねて解釈することの妥当性は検討されなければならない。

そこで本発表では、九鬼が残した僅かな手がかりに依拠しながら、九鬼のいう「垂直的エクスタシス(神秘說的形而上学的脱自)」を発表者なりに解釈する。その上で私たちが、「垂直的エクスタシス」においていかなる体験をし得るのかについて具体的に検討することを目指す。その際に発表者が着目したいのは、九鬼が現象学者オスカー・ベッカーの藝術論『美のはかなさと藝術家の冒険的性格について』(1929)に言及

している点である。九鬼は、「形而上学的時間」(1931)の中で、同書に触れて「ベッカーの説くところは実に回帰的時間の神秘說的形而上学的脱自としての現在にほかならない。垂直的「エクスタシス」としての今にほかならない」(III, 194)と強調している。この記述からわかるように、九鬼にとってベッカーの藝術論は、自身の「垂直的エクスタシス(神秘說的形而上学的脱自)」の議論と大きく重なっているといえよう。

それゆえ本発表では、「垂直的エクスタシス」を含む九鬼の時間論が、ベッカーの藝術論とどのように関係しているかを議論する。その際、九鬼が言及するように、ベッカーの「永遠の現在(*ewige Gegenwart*)」や、「超存在学的現象(*hyperontologisches Phänomen*)」または「超現象(*Hyperphänomen*)」の概念と、それらに対する九鬼の解釈を比較検討することを通じて、九鬼とベッカーとの哲学的差異まで明らかにすることを目指す。本発表ではこれらを考察することを通じて、九鬼の「垂直的エクスタシス」概念の内実を明らかにするとともに、「垂直的エクスタシス」に基づく「回帰的形而上学的時間」という、九鬼の時間論に関して従来とは異なった解釈を提示できると考えている。

以上からも理解されるように、発表者が九鬼の時間論に着目するのは、それが九鬼哲学における偶然論や文藝論などと密接に関わっているからに他ならない。実際、九鬼は『偶然性の問題』(1935)において偶然性の時間性格を論じているだけでなく、文藝論においても文学の時間性を議論している。それゆえ最終的に本発表では、「垂直的エクスタシス」の検討を通じて、九鬼哲学全体において時間論を適切に位置づけることを試みたい。

【凡例】

九鬼周造の著作は、『九鬼周造全集』(岩波書店・1980-1982)から引用・参照し、本文中に(巻号・頁数)の形で示した。引用に際しては、原則、旧漢字・旧仮名遣いを新字・新仮名遣いに改め、九鬼が強調した下線は必要に応じて削除した。

【引用・参照文献】

Oskar Becker, „Von der Hinfälligkeit des Schönen und der Abenteuerlichkeit des Künstlers“, in: *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung 10 (Suppl.)*, 1929, S. 27-52.

伊藤邦武『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』、ぶねうま舎、2014年。

田中久文『九鬼周造—偶然と自然』、ペリかん社、1992年。

田中久文『九鬼周造』、講談社学術文庫、2022年。

本郷均「九鬼周造における無と芸術」、東京電機大学『東京電機大学総合文化研究』第16号、2018年、pp. 31-40。